

## [27]文學研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2556617>

---

出版情報：文學研究. 27, 1940-07-25. 九州文學會  
バージョン：  
権利関係：



# 雜 錄

## 最近の國語問題

—「東亞に於ける日本語」と「國語問題と英語科問題」—

國語國字の問題は國民にとつては永遠の課題である。たゞ最近これに關する議論が俄に盛になつて來た事は、それが從來の様に外來文化の移入に接して提起せられたものではなく、支那事變を契機とする日本文化の海外進出と密接に聯關して促進されたものである點に於て重大な意義を有すると思ふ。國語國字の問題が日本國家發展の上から緊急の問題として取上げられざるを得ぬ事態には注目し値するものがあるのである。最近發表された此の方面の著述や論説は實に夥しいものであるが、その中に『文學』四月號「特輯・東亞に於ける日本語」と藤村作博士著「國語問題と英語科問題」とがある。

### 二

岩波書店發行の雜誌『文學』は本年（昭和十五年）四月號を「特輯・東亞に於ける日本語」と銘うつて國語國字問題に關する諸家の論説、研究、隨想を集録した。内容は、「所謂國語問題の歸趨・山田孝雄」「進出の形態と方策・安藤正次」「東亞に於ける日本語・小林好日」「國語の整理とは何のことか・神保格」「日本語の再認識」以下總數十七氏の寄稿であるが、本特輯號の特色は一方に於て實

際體驗者によつて國語國字が東亞に於ける共通語として如何に苦惱の状態にあるかが如實に語られると同時に他方に於て斯道の老大家の意見が改めて提出された事にある。本特輯號が如何なる程度に於て此の問題に解決乃至示唆を與へ得たかは別として極めて時宜を得たものであると思はれる。

### 三

日本語は昭和十三年（康德五年）から滿洲國の國語にもなつた。支那では滿洲事變の前あたりから日本語を中等學校で教へてゐたが、支那事變になつてからわが皇軍の占據地域ではその秩序の恢復と共に學校に於て日本語を課するもの多く、一般民衆の日本語學習熱も非常に高められるに至り、且つ一方タイ、濠洲、その他海外諸國においても、近年日本語學習の氣運がある。これに應じて、最近わが國では日本語の普及進出の問題が活潑に論議されてゐるが、文部省に於ても、日本語の普及をもつて東亞新秩序建設の根基とし、日本語を東亞の共通語たらしめることを期して、その方策を立てるために、昭和十四年六月以來、協議に調査に萬全の方策を盡くしてゐるのであるが、しかも東亞に於ける日本語は外國人に對する外國語として赤裸々な檢討に直面し外國人を相手とする實際教授を通じてその内に藏する不便と困難とを早くも暴露してしまつたやうである。

外國人相手の國語教科書一冊を作るにしてもすでに問題が多い國民教育のための國定國語讀本が日常の日本語そのものを全然知らない異民族に對する日本語教科書として適當なものであり得な

い事は言ふ迄もないが、それにしても種々の點に於て矛盾、不統一を含む日本語が宛も無政府状態に於て横行する現状は正に心ある者の痛憤に値するものがあるであらう。標準語、發音、アクセント、假名遣の問題等、國語の整理統一の必要が此の方面から一層強く叫ばれる所以である。外地に於ける日本語の苦悶は内地にある者の等しく聞き捨てがたいものである。

## 四

日本語の海外進出は國語國學問題の再檢討に絶好の機會を與へて居るやうである。しかしながら靜に考へれば、日本語の海外進出は國語國字問題に對してはどこまでも外面的な契機であるにすぎない。外國人相手の日本語教授に不便乃至困難が多いからといつて便利主義の改良論が勢力を得て外國人のみを相手とする特殊の日本語乃至日本語を生むに至ることは決して日本語の正しい普及ではない。日本語は不便困難であるといふ聲が一面に於ては國民の自國語に對する必要以上の不信をそゝる結果となつてゐる現状を見逃すことは出来ないと思ふ。日本語の海外普及は國語國字の整理統制を促進せしめるものではあるが一步誤つてその功を急げば反つて亂雑不統一に拍車をかけることになる。國語の整理統制を亂すものが反つて國語國字問題論者自身であることを忘れてはならない。この意味に於て倉野憲司氏の「國語の整理統制をなし得る唯一のものは國家である。國語に國語の調査、整理統制に關する有力な機關が設けられて、國語の傳統を尊重すると共に新時代の趨勢を洞察し、飽くまで學術的根據に立つと共に常に實際を

考慮して事に處してこそ、始めてこの重大な問題は解決されるのである」といふ意見は一言にしてその意を盡くしてゐると思ふ。そして又卷頭の山田孝雄博士の所論も同様の意味に於て輕卒な改良論者を戒めるに十分である。博士は次の様に言つて居られる。「國語が亂雑だとか無統制だとかいふが、その亂雑無統制になるやうにしたのは何人であるか。これには明治維新以後の羅馬字採用論者、漢字排斥論者、假名遣破壞論者等所謂國語政策論、國語改良運動をやつた者共の責任の大なるものがある。彼らの多くはその國語政策の論を教育上の實地に行つて害毒を流したことの多大なものがある。或る高官は職權を以て假名遣を破壊した法規を命令したことがある。或る直轄學校長は羅馬字を以てその學校の答案一切を書くべきことを嚴命したことがある。或る中學校長はエスペラントを學校の教課として生徒に課したことがある。これらの人々は政策論と實地の用とを混同して何の見さかひもない者どもである。一行政官、一學校長が何人から權能を能へられて國民公用の言語文學を勝手に改めて使用せしめ得るのであるか。かやうな事を制止し得なかつた文部省の過去のやり方にも責任があるといはねばならぬ。又假名遣については國家の教育の樞軸にあるやうな學校に於てそんなものはどうでもよいと云つてわざと放任してゐたのである。かやうに積極的に又消極的に上層にあるものが統制を破つてみせるのであるから、下流のものが之に做ふのは蓋し自然の勢であらう。それ故に無統制亂雑になつたのは國語の内部に原因があるのでなくしてそれら國語政策論者が私見を

勝手に實行して國家の教育を蹂躪し國語の純正を淆亂した爲に生じたものである。かやうな譯であるからして、その統制せらるべく、整理せらるべきは國語論者自身の上に存するのである。」

## 五

大陸に於ける日本語の普及は熱心な日本人によつて獻身的に行はれて着々とその功をおさめてゐるのである。この方面の實狀を語るものとして「大陸に於ける日本語の教室・西尾實」「會話と問答・長沼直兄」「おりろ！・各務虎雄」「日本語の教室・一谷清昭」等がある。此の方面の實績が將來を期待せしめるのである。

## 六

さて藤村作博士の「國語問題と英語科問題」は最近發表の論文を集録したものである。はじめに自序があり、次に國語問題として「日支事變と國語政策、國語問題」「漢字問題」「字音假名遣問題」「國語の醇正統一について」「皇室神宮に關する文の敬語法」「國語愛とその實踐」「日本語の外地普及とその教科書」「讀本の文章」の各項目、次に英語科問題として「英語科處分の急務」「英語科廢止の論争に就いて」「中學英語科全廣論」の各項目がある。英語科問題は近年博士が大いに力説されるところであるがここで觸れぬことにする。國語問題に關する二三の示唆を拾つてみよう。

## 七

先づ第一に漢字制限の問題がある。漢字制限は永い間の懸案でありて曾て國家が所謂常用漢字たるものを制定した事があつたが

その結果は成功とはいへなかつた。或人は重要な動語中の字が欠けてゐるからいけないといひ、或人は憲法中の何の字が脱けてゐるからよろしくないといふ。又或人は岐阜縣の阜、長崎縣の崎等は常用漢字の中に入れるがよいともいひ議論紛々であつた。藤村博士は常用漢字の持つかゝる欠點を除くために漢字を必要の程度に應じて三種類と定めよといはれるのである。第一種は讀むことも書くことも必要なもの、第二種は第一種に屬せぬものの中新聞雜誌等の讀む上からはその必要を感じられるもの、第三種は特殊ではあるが、勅語、憲法、年號等の文字として國民として必讀を要するものである。この提案も果して十分なものであるか否かは問題である。曾て常用漢字制定の標準に疑義があつた事はこの藤村博士の三種の漢字の分類の際にも當然起り得る事である。しかしともかくも考慮に値する意見であると思はれる。(二八—三六頁)

第二に字形整理の問題がある。本屆の縦の棒をはねるはねぬのやかましいことを言つたり、月扁の三種の區別をやかましくいひかういふ瑣細なことに注意がむけられ、肝腎なことが忘れ勝ちなことも國字問題の一つである。藤村博士の説は要するに筆寫體として行書體を基準とするにある。漢字使用上の不便と學習上の困難はこれを活字と筆寫字とに分けて考へて見ねばならないのであるが、その不便困難は多く筆寫字とにある。この筆寫字をすべて行書化することとしこれに統一と簡易化とを興へて漢字字形のもつ不便困難を救ふべしといふのである。この事は楷書でかくことを以て公式とする考を一掃し外國字の活字體に對する筆寫體の如

きものを現出せしめんとする點に於てすこぶる見るべきものがあると思はれる。(三六一—四六頁)

第三には片假名を以て發音符號とする説である。藤村博士によると假名遣は國語假名遣は勿論のこと字音假名遣も大體そのまゝにして置いて別に國語發音符號を制定してそれを假名遣の外に存在させるといふのである。その發音符號として考へられるものが片假名である。たとへば「蝶」の字に振假名をするときはその字音が「てう」であるとかゝはらず「テヨウ」とし又國語に適用して「かれひ」などとするのである。これもやゝ珍奇の觀があるが十分検討されてよい意見であると思ふ。辭書の「かれひ」といふやうな書方がすでにそれを暗示してゐるのであるから。(七八—八〇頁)

# 彙報

## 九州帝國大學法文學部文學關係學科講義題目

第一學期 (昭和十五年度)

國語學	特講古今集概説	高木教授	佛文學	講義佛蘭西文學史	進藤助教
國語學	特講新古今和歌集	高木教授	佛文學	演習古典悲劇	進藤助教
國語學	演習淨瑠璃	小島助教	獨文學	獨逸文學概説	小牧教授
國語學概論		小島助教	獨文學	演習A フラスト第二部	小牧教授
		笹月講師			

演習源氏物語  
支那文學

笹月講師

支那文學概論

詩經講義 (大雅ヨリ)

目加田教授

明末文學演習陶菴夢憶

目加田教授

支那語學

松枝講師

紅樓夢

松枝講師

英文學

講義 English Romantic Poets

豊田教授

演習 Galivens Travel 文 Sartor Resartus

豊田教授

中世英文學史

中山助教

講讀 Chaucer: The Canterbury Tales

中山助教

演習 A. Huxley Two or Three Graces

中山助教

The Poems of Robert Herrick

中山助教

英語學

メーヤー講師

English Phonetics

豊田教授

English Prose Composition

メーヤー講師

佛文學

メーヤー講師

講義佛蘭西文學史

進藤助教

演習 古典悲劇

進藤助教

獨文學

進藤助教

獨逸文學概説

小牧教授

演習A フラスト第二部

小牧教授